



Title	空間認知の枠組みを用いた感情表現の考察 : ベトナム語 thương における視点の選択
Author(s)	ドアン, ゴク ミン トラン
Citation	大阪大学言語文化学. 2026, 35, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

空間認知の枠組みを用いた感情表現の考察

—ベトナム語 *thuong* における視点の選択—*

ドアン ゴク ミン トラン**

キーワード：感情表現、視点、ベトナム語

This paper examines the semantic features and usage of the Vietnamese emotional expression *thuong*, with particular attention to how its interpretation depends on perspective-taking. The word *thuong* originates from the Chinese character “傷,” which originally referred to physical wounds. Over time, its meaning expanded to psychological pain, and in modern Vietnamese, it is often used to express compassion and concern for others.

For comparison, the paper refers to the Japanese expression *kokoro ga itamu* (“the heart aches”), which also conveys compassion but in a different way. In Vietnamese, *thuong* tends to reflect an outward orientation: the speaker adopts the perspective of another person and senses the other’s pain as if it were their own. In Japanese, *kokoro ga itamu* shows an inward orientation, emphasizing the speaker’s own emotional response.

Levinson’s (1996) theory of Frames of Reference, especially the relative frame, is used to explain these contrasts. The analysis suggests that *thuong* is natural when the other’s suffering is evident, but less natural when the concern is only subjective. In many contexts, *thuong* can also combine two viewpoints, allowing the speaker both to share the other’s situation and to indicate their own feelings.

The paper concludes that *thuong* may be understood as a perspectival expression of compassion. This perspective-based approach illustrates some ways in which Vietnamese and Japanese differ in expressing similar emotions, and points to the role of viewpoint in shaping the semantics of compassion.

* A Study of Emotional Expression through the Framework of Spatial Cognition: Perspective Selection in the Vietnamese *thuong* (DOAN Ngoc Minh Tran)

** 大阪大学大学院人文学研究科 言語文化学専攻 博士後期課程

1 はじめに

本稿の目的は、ベトナム語の感情表現 *thương* に見られる多義的な意味とその用法を確認・整理し、特にその使用における「視点」のあり方に注目することにある。辞書の記述（『大南國音字彙』（Đại Nam Quốc Âm Tự Vị, 1895: 429）など）によれば、*thương* は「物理的な痛み」や「心理的な傷」、さらには「相手への心配や共感」といった多様な意味を持ち、文脈によって異なる形で用いられるのが特徴である。本稿では、それらの意味が実際にどのように使われているのかをまず実例を通して検討する。その上で、日本語の表現「心が痛む」との比較を行い、*thương* が相手の視点に立って感情を捉える表現であることを明らかにする。このような視点の取り方は、Kövecses (2000) や Wierzbicka (1986) などの感情表現に関する先行研究でも十分に論じられておらず、通言語的に見ても注目すべき特徴である。

一般に、感情は「個人内の反応」や「生理学的なプロセス」として理解されることが多く、心理学的・生理学的なアプローチに基づく研究が主流を占めてきた (Ekman, 2003; Lakoff and Kövecses, 1987 など)。たとえば、認知言語学の立場において Lakoff and Kövecses (1987) が示した感情モデルでは、「怒り」は血圧の上昇や体温の変化といった身体的反応に対応物を持つという分析がされ、そうした身体的変化に基づくメタファー表現が議論されている。この身体基盤のモデルは英語に限らず、日本語 (Matsuki, 1995) などといった他の言語における感情表現の分析にも広く応用されてきた。身体的反応という共通基盤に着目することで、感情の概念化における各言語の共通点と相違点を捉えやすくなり、通言語的比較の有効な出発点となる論考であった。

しかし、Kövecses (2000) のメタファー理論は、文化の多様な感情表現を認めている一方で、その多様性はあくまで「身体的経験」をベースとしたメタファーや表現の違いにとどまる傾向が強い (p.165)。言い換えれば、彼の感情表現の分析は、実際の感情表現は「誰に」「どんな場面で」感じるかという人間関係や場面に注目していない。

- (1) “...but nevertheless, they can choose to conceptualize their emotions in many different ways within the constraints imposed on them by universal physiology.”
(Kövecses, 2000: p.165)

特に、感情が他者との関係や具体的な状況の中で経験されることを踏まえると、いわゆる「対人的側面」に十分配慮した分析を行う必要がある。実際、日常言語における感情表現は、話者が他者の状況をどのように受け止め、どのような視点から感情を抱いているかに大きく関係していると考えられる。例えば、ベトナム語の *thương* と日本語の「心

が痛む」の両者はいずれも、他者に対する心配を表す表現である一方で、その使用や意味の広がりにおいて重要な違いが見られる。ここで、本稿の論点を明らかにするために、ベトナム語の *thương* と日本語の「心が痛む」の意味の違いを簡単に示しておきたい。

(2) 【寒空の下、ホームレスの子供が薄い服を着て震えていた。】

a. ベトナム語：Tôi cảm - thấy thương đứa bé.

私 感じる - 見える 傷 子供

b. 日本語：私はその子を見て、心が痛んだ。

例 (2a) と (2b) では、どちらも話者が目の前の出来事（その子供の困難な状況）を認識し、それに対して「かわいそうだ」といった感情が表現されている点で共通している。

しかし、ベトナム語の *thương* と日本語の「心が痛む」の2つの表現が使用される場面や解釈の仕方を詳しく比較すると、話者がどの視点を基準に感情を表現するかという点において、重要な違いがあることが分かる。例えば、

(3) 【何度も注意しているのに、30歳の息子は遊んでばかりで、きちんと仕事を探そうとしない。母親として、息子のことが心配だ。】

a. ベトナム語：(??) Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.

私 感じる - 見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語：息子の将来のことが心配で、本当に心が痛む。

この状況において、例 (3b) に示されているように、日本語の「心が痛む」は、息子の様子を見て「将来が心配だ」という推測から自然にこの表現が用いられる。一方、同じ文脈であっても、例 (3a) に示されているように、ベトナム語の *thương* を使用すると、容認度が下がる文となる。これは、息子自身が30歳でまだ仕事を見つけれられていないという状況に対して、具体的な「苦しみ」が明示されていないために、*thương* の使用には違和感が生じるためである。このように、同じく「心配」を表す表現であっても、日本語とベトナム語では使用される前提条件に違いがあることが分かる。

このような差異はなぜ生じるのであろうか。本稿では、ベトナム語の *thương* の意味解釈を、Levinson (1996) の空間認知の枠組みを用いて分析する。特に「話者の視点選択」が感情表現の意味にどのような影響を与えるかを考察し、*thương* が視点の選択によって意味が決定される表現であることを示す。

本稿は、ベトナム語の感情表現 *thương* の意味的特徴とその使用条件を、日本語の「心が痛む」との比較を通して明らかにすることを目的とする。本稿の構成は次の通りである。第2節では、*thương* の語源およびベトナム語としての語義の広がりや辞書記述から確認し、第3節では現代ベトナム語における用法を具体例に基づいて整理した上で、「心が痛む」との意味の重なりと相違点を検討する。第4節では、Levinson (1996) の空間認知における相対的参照枠の理論を概観し、第5節ではその理論を応用して、*thương* の意味解釈における視点の影響、日本語の「心が痛む」との意味的違いが生じるメカニズムを分析する。第6節では、本稿の考察結果をまとめる。

2 ベトナム語 *thương* の語源と意味の広がり

ベトナム語 *thương* は元々「傷」を表す漢字に由来し、そこから「身体的損傷」や「心理的な痛み」を指す語として用いられるようになった。その後、意味領域は拡張し、現代語では「他者への共感」など感情を表す用法へと発展している。

本節では、この語義の広がりを辞書記述に基づいて整理する。まず2.1節で漢字表記の付された辞典を用いて基本義と多義性を確認し、2.2節で漢越辞典の記述から借用語としての性格を検討する。最後に、2.3節で現代語辞典の項目立てを参照し、感情表現としての *thương* の位置づけを明らかにする。

2.1 漢字表記を付したベトナム語辞典における記述

まず、漢字が付記されているベトナム語辞典によると、ベトナム語の *thương* という語は、もともと漢字（中国語）の「傷」に由来している。例えば『大南國音字彙』（Đại Nam Quốc Âm Tự Vị, 1895: 429）や『越南字典』（Việt Nam Tự Điển, 1931: 587）では、*thương* の多義性が以下のように示されている¹。

(I) 身体的な傷（例えば、*vết² thương* 「疳傷」(傷)）

(4) Tôi có một vết thương ở tay. (作例)
私 ある 一 類別詞 傷 に 手
「私は手に傷がある。」

(II) 心理的な傷（例えば、*thương tổn tinh thần* 「傷損精神」(心理的に傷つく)）

(5) Cô ấy bị thương tổn tinh thần. (作例)

¹ 以下の分類は筆者が両辞典を参照の上、意味のまとまりに基づいて整理したものである。また、各グループ内の語は一部のみを示したものである。

² 現代ベトナム語で類別詞として扱われる。ある表面に残った（乾いた状態の）跡を特定する（ex. một vết máu 一つの乾いた状態の血痕）(Ngo 2014: 204)

彼女 受身 傷損 精神

「彼女は心理的に傷ついた。」

(Ⅲ) 悲惨さに対する観察者の評価 (例えば, thương tâm 「傷心」 bi thương 「悲傷」)

(6) Hậu quả của chiến tranh thật thương tâm. (作例)

結果 の 戦争 本当に 傷 心

「戦争の結果は本当に痛ましい。」

(Ⅳ) 他人への感情 (例えば, thương kẻ nghèo 「傷+貧しい人」(貧しい人に共感する))

(7) a. Tôi thương kẻ nghèo khó. (作例)

私 傷 人 貧しい 困難な

b. Tôi cảm thấy thương kẻ nghèo khó. (作例)

私 感じる - 見える 傷 人 貧しい 困難な

「私は貧しい人をかわいそうに思う。」

まず、例 (4) に見られるように, thương は基本義として身体的な損傷 (手の傷など) を表す名詞であり、単独ではなく類別詞とともに用いられる。一方、例 (5) では、この物理的な意味から拡張し、心理的な損傷を表す動詞として用いられており、外部からの出来事や言動によって内面が傷つくことを示す thương tổn のような複合語を形成する。この場合, thương は「傷つく」という状態を表す。さらに、例 (6) では、痛ましい出来事 (戦争の結果など) そのものに対する評価を表し、観察者の感情的反応というよりは、状況の悲惨さを形容する形容詞的用法である。このように, thương は心理的な反応を述べる動詞的用法 (5) とは異なり、出来事の性質を叙述する語として機能している。最後に、例 (7) では, thương が他者への共感・心配を表す動詞として用いられている。ここでは、相手の困難や不幸を自分のことのように感じ取る心的態度を示し、単独で用いられるほか, cảm-thấy 「感じる - 見える」のような感覚動詞とともに使われることも多い。

ただし、これらの辞典には、それぞれの意味が歴史的な順序あるいは使用頻度に基づいて分類されているという言及は見られない。そのため、どの意味が漢文 (中国語) からの借用に当たるのかをより明確にするには、ベトナム語に取り入れられた漢語 (いわゆる「漢越語」) を専門的に収録した辞典も参照する必要がある。

2.2 漢越辞典における記述

そこで、『漢越辞典』（Hán Việt Từ Điển, 1942: 40）や『漢越辞典簡要』（Hán Việt Từ Điển Giản Yếu, 1931: 840-842）など、主に漢文から取り入れられた漢越語を詳述する辞典を確認すると、「傷」（thương）の項目では、

- （8） 身体的な傷：thương tích（傷跡）、thương hàn（傷寒）など
 - （9） 心理的痛み：thương cảm（傷感）など
 - （10） 悲惨さに対する観察者の評価：傷心（thương tâm）、慘傷（thảm thương）など
- といった意味が主に取り上げられている。

ところが、これらの辞典には、用法（IV）（他者に対する感情）で見たような、thươngを単独で用いる現代ベトナム語的な用法はほとんど確認されない。このことから、ベトナム語の thương は漢文から取り入れられた当初、主に身体的あるいは個人的な心理的痛み、困難な状況に関する意味を持ち、現代ベトナム語で広く使われる例（2a）と例（7）で見たような「他人への共感」といった意味は、ベトナム語に借用された後で新たに定着した用法であると考えるのが自然であろう。

2.3 現代語辞典における意味の扱い

このような語義の変遷を踏まえて、1945年以降の文学作品や出版物を主なデータとして編纂された現代ベトナム語辞典の Từ Điển Tiếng Việt『ベトナム語辞典』（2021）（ローマ字表記のみで、漢字の付記なし）を参照すると、見出し語は単語または語句として成立している表現ごとに独立して提示されている。そのため、従来一つの項目に含まれていた意味も、以下のように分かれた項目として掲載されている。

- （11） bị thương（見出し語 bị）（動詞）（p.76）：身体的な傷を負う
- （12） vết thương（見出し語 vết）（名詞）（p.1235）：具体的な傷跡や外傷
- （13） thương tâm（見出し語 thương tâm）（形容詞）（p.1236）：痛ましい
- （14） thương（見出し語 thương）（動詞）（p.1410）：愛情や共感といった感情表現

2.1 節で確認した辞典では、thương の多義性が一つの項目にまとめられ、「身体的な傷」「心理的な傷」「痛ましい状況」「他者への感情」といった用法が並列的に提示されていた。これに対し現代語辞典では、それぞれが別々の見出しとして整理される。

たとえば、（11）の bị thương、（12）の vết thương、（13）の thương tâm は thương を要

素とする複合語として扱われ、「身体的損傷」や「痛ましい状況」に特化している。他方、感情表現としての (14) の *thương* (例 (7)) は単独の動詞として用いられ、「他者への共感」を表す独立項目となる。こうした違いから、母語話者にとって *thương* を感情表現とする用法は独立した意味として認識され、「傷」という基本義との直接的つながりは意識されない可能性がある。次節では、現代ベトナム語における *thương* の用法を具体的文脈で確認し、それぞれの語義が日本語でどのように訳されるかを考察する。

3 日本語の「心が痛む」との比較

本節では、ベトナム語の *thương* の意味の広がり进行を明らかにするために、日本語の「心が痛む」と比較する。両者はいずれも他者の状況への共感や心配を表す点で一致が見られるが、その用法と意味の範囲には違いもある。まず 3.1 節で *thương* の用法を整理し、3.2 節で「心が痛む」との共通点と相違点を考察する。

3.1 現代ベトナム語における *thương* の用法

現代ベトナム語における *thương* は、意味によって用いられる形が異なる。感情を表す場合には単独の動詞として使われるのに対し、身体的あるいは心理的な「傷」を表す場合には、固定的な語構成 (2.1 節で述べた *vết thương*、*tổn thương*、*thương tâm* など) の中で現れることが多い。本節では、このような用法の違いを具体的な例文に基づいて整理し、*thương* がどのように多義的な機能を有しているかを確認する。

(I) 物理的な傷

まず、(15a) のように、*thương* は類別詞 *vết* (「痕跡」を意味する) とともに用いられ、「物理的な傷」を表す名詞句となる。このとき、*vết* の存在によって *thương* の意味が具体化され、実際の負傷を指す表現として成立する。日本語でも、(15b) のように「傷」は身体的なけがを示す語として使われ、*vết thương* に対応すると考えられる。

(15) a. ベトナム語

Tôi có *(*vết*) thương ở chân do tai nạn giao thông.
私 ある 類別詞 傷 に 足 によって 交通事故

b. 日本語：私は交通事故によって足に傷を負いました。

また、(16a) のように、受動構文の標識 *bị* を前に置くことで、「(外部要因によって) 傷を負う」という動詞的な意味を持つようになる。この表現は、身体的な負傷を表すも

のであり、日本語では (16b) のように「～で／～して傷を負う」と訳することができる。

(16) a. ベトナム語:

Cô ấy bị thương ở tay do dùng dao không cẩn thận.
彼女 される 傷 に 手 によって 使う ナイフ 不注意に

b. 日本語: 彼女は不注意な包丁の使い方をしていて、手に傷を負いました。

(II) 心理的な傷

thương は物理的な傷だけでなく、心理的な傷も表す。特に、(17a) の tổn thương (損傷) は動詞 làm (「～させる」) と結びつき、「相手の心を損なう」という意味になる。この表現は身体的な傷ではなく、言葉や行動によって相手の内面に与えるダメージに焦点を当てている。日本語では、例 (17b) のように「傷つける」という動詞が対応する。

(17) a. ベトナム語: Lời nói đó đã làm tổn thương cô ấy.

言葉 その させた 損傷 彼女

b. 日本語: その言葉は彼女を傷つけた。

(III) 悲惨さに対する観察者の評価

次に、(18a) の thương tâm は、出来事や状況そのものの「悲惨さ」を表す語である。これは、(17a) の tổn thương (心理的な傷) のように「誰かの内面の痛み」を描写するのではなく、目の前の出来事や状況のひどさを示すために用いられる。thương tâm (傷心) は文字通り「傷ついた心」に由来するが、ここでは個人の心情よりも出来事の深刻さに焦点があり、心理的ダメージを抱える主体は明示されない。一方、日本語でも (18b) のように「痛ましい」という形容詞で同様の評価が可能だが、日本語は「傷」を使わず、「心」や「感情」による抽象的評価を用いる点が注目される。

(18) a. ベトナム語: Tin tức về vụ tai nạn thật thương tâm.

ニュース について 事故 本当に 傷心

b. 日本語: その事故のニュースは本当に痛ましい。

以上のように、(I) ～ (III) の用法において thương はいずれも「傷」という意味に根ざしており、「痛み」を表す点で日本語との対応も見られる。しかし、次の (IV) の用法では、ベトナム語では (I) ～ (III) と同様に「傷」に由来する thương を用いる

のに対し、日本語では「心が痛む」といった心的領域に焦点を移す表現を用いる点で異なる。

(Ⅳ) 他人に対する感情

thương は「自己の傷」を表す名詞を超え、「他者の物理的・心理的痛みへの共感」を示す動詞へ発展した。例 (19a) の cảm thấy thương (感じる - 見える + 傷) は逐語的に「相手の傷を感じて見える」を意味し、話者が「寒空で震える子供」を見たとき、その苦しみを自分の感覚として受け止めることを示す。thương は本来「傷」を意味し、相手の痛みや困難を自分の傷のように引き受けることで「共感」「同感」の意味が生じた。他方、例 (19b) の日本語の「心が痛む」は同じ状況下でも「私はその子を見て心が痛む」と表現し、相手の苦しみに反応して自己内面に痛みが生じる感情反応を示す。

(19) 【寒空の下、ホームレスの子供が薄い服を着て震えていた】 (= (2))

a. ベトナム語: Tôi cảm - thấy thương đứa bé đó.

私 感じる 見る 傷 子供 その

字句通りの逐語訳: 私はその子の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳: 私はその子の傷を感じ自分の傷のように受け止める。

b. 日本語: 私はその子を見て、心が痛む / 傷ついた。

上記のように、thương は身体的・心理的な傷、痛ましい状況、そして他人への感情を表す際に多義的に用いられている。中でも、特に「他人への感情」を表す用法は、日本語の「心が痛む」と類似しているように見える。両言語は共感を表すという点で重なりを持ちながらも、ベトナム語は外向的に「相手の傷を感じ取る」ことを強調し、日本語は内向的に「自己の内面的感情」に焦点を置くという対照的な特徴を示している。そこで次節では、両語の用法における具体的な相違点について検討する。

3.2 日本語の「心が痛む」との相違点

前節では、両語の類似点を確認したが、用法の全てが一致するわけではない。ここでは、特に次の相違点に注目する。話者の主観的な心配を表す場合、thương は必ずしも自然に用いられるわけではない点である。

まず、「話者が一方的に抱く主観的な心配」において、thương がどのように制約を受けるのかについて考察する。以下のような文脈を考えてみる。

- (20) 【何度も注意しているのに、30歳の息子は遊んでばかりで、きちんと仕事を探そうとしない。母親として、息子の将来が心配だ。】 (= (3))

a. ベトナム語: (??) Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.

私 感じる - 見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語: 息子の将来のことが心配で、本当に心が痛む。

例 (20) の文脈では、母親である話者は「30歳の息子が遊んでばかりで仕事を探さない」ことから、その将来を一方的に心配している。この状況で例 (20b) の日本語「息子の将来のことが心配で、本当に心が痛む。」は自然に言える。一見すると「心が痛む」はベトナム語の *thương* に近いようだが、実際には例 (20a) で *thương* を使うと違和感がある。息子の状況は明確な苦痛や困難とはみなされず、母親が主観的に案じているだけだからである。したがって、日本語では自然でも、ベトナム語では用いにくい点に違いがある。

以上の考察から、日本語の「心が痛む」とベトナム語の *thương* は、いずれも他者の状況に対する共感や心配を表す表現でありながら、その使用条件には明確な違いがある。「心が痛む」は話者の内面的な感情反応を中心とし、相手の苦しみが客観的に明示されていない場合でも自然に用いられるのに対し、*thương* は、相手に実際の苦痛や困難が明確に存在し、話者がそれを感じ覚的に共有する状況でなければ不自然に感じられる。つまり、「心が痛む」は自己志向的、*thương* は他者志向的な性質を持つと言える。

こうした相違は、両表現がどのような「視点」に基づいて感情を捉えているかに関わっていると考えられる。次節では、Levinson (1996) の「相対的参照枠」の理論に基づき、話者と対象との視点関係が感情表現の意味解釈にどのような影響を与えるのかを、認知的観点から分析する。

4 理論的枠組み (Levinson, 1996)

本節では、*thương* の使用を理解する枠組みとして Levinson (1996) の空間認識研究を紹介する。Levinson は、空間に関する表現が単なる語彙差ではなく、文化ごとに異なる認知的枠組み、すなわち空間情報の捉え方を反映すると強調する (pp.376-377)。この点は、認知プロセスや文化固有の空間的思考が言語表現にどう投影されるかを再考する必要を示す。具体的に彼は3種類の参照枠 (Frames of Reference) を提示している。

(I) 絶対的参照枠 (Absolute Frame of Reference)

絶対的参照枠とは、固定された方向や基準 (例: 北・南・東・西・山の上 / 下・海側

/ 陸側など) を用いて空間関係を記述する枠組みである。この枠組みでは、観察者の視点に依存せず、外部の基準 (allocentric system) に基づいて空間関係が認識される (pp.371-373)。

(Ⅱ) 内在的参照枠 (Intrinsic Frame of Reference)

内在的参照枠とは、物の固有の属性や構造に基づいて、位置や方向を定義する枠組みである。たとえば、(21) の in front of the TV においては、「前」という位置は観察者の立場によって決まるのではなく、テレビ画面が視聴者に向けて情報を発信する側＝映像を見る側が「前」とされる。このように、内在的枠における空間理解は、対象物が持つ固有の構造・機能・方向性に根ざしているのが特徴である (pp.366-368)。

(21) in front of the TV → 画面が提供する視聴位置に基づく。(Levinson, 1996: 368)

(Ⅲ) 相対的参照枠 (Relative Frame of Reference)

相対的参照枠とは、対象物の属性を基準とする内在的参照枠と異なり、観察者 (話者や聞き手) の視点を基準とする空間認識の枠組みである。この参照枠では、物体同士の位置関係は観察者の立ち位置や身体の向きに依存して決まる。そのため、同じ対象を見ても観察者ごとに空間の捉え方が異なることがある (pp.369-371)。

図1において、人物Aの横にボール (物体) が配置されている。このとき、Bにとってボールの位置をどのように捉えるかには、少なくとも2通りの可能性がある。



図1：視点による解釈

次の図2では、それぞれの視点の取り方に基づく解釈の違いを示す。

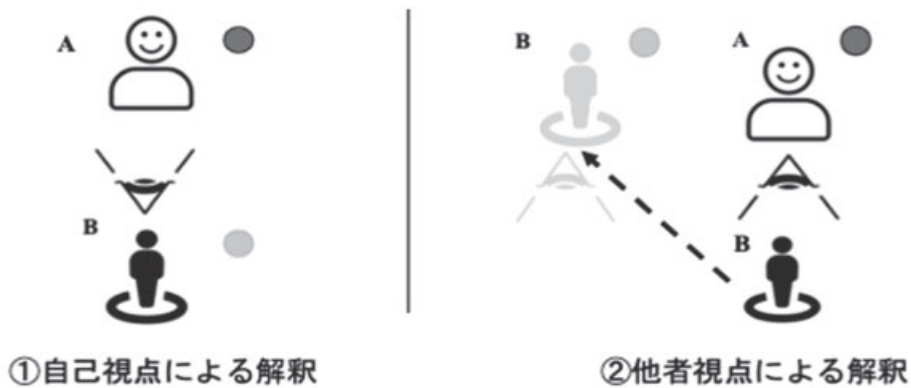


図 2：視点の選択による空間認識の違い（Levinson（1996）を参考に作成）

① 自己視点による解釈（図 2 の左）

まず、B が自分の立ち位置と身体方向を基準として空間を認識する場合、ボールは A の「右側」にあると解釈される。このように、B が自己中心的な視点を採用すると、他者である A の視点は空間理解に反映されない。そのため、例（22）のように表現できる。

（22）（B が話者）「ボールは A の右にある。」

② 他者視点による解釈（図 2 右）

一方、B が A の立場に立ち、仮想的に A の視点を共有する場合、ボールは「A の左側」にあると解釈される。このとき、B は自分の身体的立場を一時的に離れ、他者視点に寄り添って空間を理解していることになる。その結果、例（23）のようになる。

（23）（B が話者）「ボールは A の左にある。」

このように、同一の位置関係でも、自己視点か他者視点かの選択によって意味構成が異なる点に本枠組みの特徴がある。

この視点選択の問題は、単に空間認識にとどまらず、感情表現や意味理解にも密接に関わっている。特に本稿で取り上げるベトナム語の *thương* に関しては、話者が相手の「痛み」や「傷」を誰の視点から捉えているかが、感情のニュアンスに深く影響する。次節ではこの点をより具体的に分析する。

5 相対的参照枠を用いた *thương* の分析

本節では、Levinson (1996) が提唱した相対的参照枠の概念を基盤に、ベトナム語の感情表現 *thương* の意味的特徴を考察する。

thương の使用には、話者が相手の立場や感情に寄り添っているかどうかに関わってくる。以下では、話者の主観的な心配と、相手の苦しさの共有が *thương* の使用にどのような影響するのかを具体例を通して見てみよう。

(I) 相手に苦しみがあるかどうか明確でない場合 (話者の視点からのみの心配)

(24) 【何度も注意しているのに、30歳の息子は遊んでばかりで、きちんと仕事を探そうとしない。母親として、息子の将来が心配だ。】 (= (3))

a. ベトナム語: (?) Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.
私 感じる - 見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語: 息子の将来のことが心配で、本当に心が痛む。

例 (24) の文脈において、例 (24b) の日本語「心が痛む」は、母親が息子の態度に抱く不安など主観的感情を自然に表せる。しかし、例 (24a) のベトナム語の *thương* はこの文脈では不自然に響く。息子自身は困難や痛みを抱えておらず、母親の感情は主観的な「心配」や「将来への懸念」にとどまっているからである。この場合は、*thương* に必要な「相手の視点を取る」という認知枠組みが成立せず、文としての自然さに欠けると考えられる。

次に、例 (24) と対照的に、相手が実際に苦しみを抱えており、話者がその内面的状態に寄り添っている文脈を見てみよう。

(II) 相手にとって苦しみであると話者に理解される場合 (相手視点に寄り添った心配)

(25) 【30歳の息子が投資詐欺で全財産を失い、生きる目的を見失ってから、毎日を遊んで過ごしている。母親として息子が心配だ。】

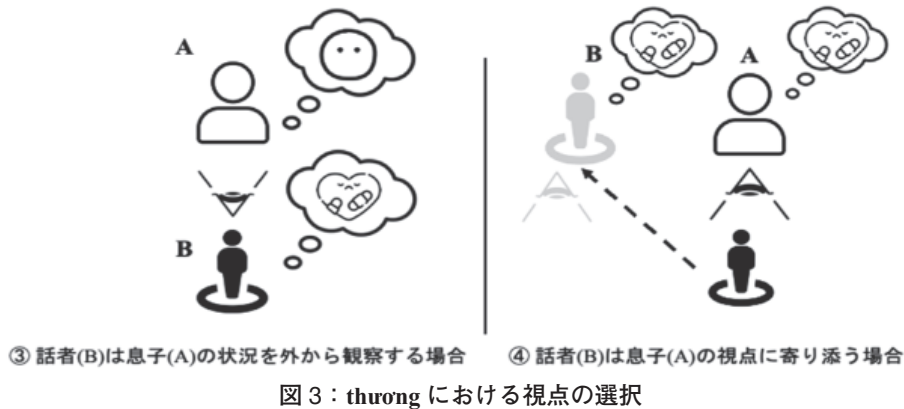
a. ベトナム語: Tôi cảm - thấy thương thằng con trai của mình.
私 感じる - 見える 傷 息子 の 自分

b. 日本語: 息子の将来のことが心配で、本当に心が痛む。

文脈 (25) では、息子が投資詐欺によって全財産を失い、生きる目的を見失っているという具体的な苦しみが描かれている。その状態が「本人にとっても苦痛である」と明確に認識される状況となっている。そして、母親はそうした息子の様子を見て、その苦

しみに共鳴し「息子が苦しんでいることを自分のことのように感じ取る」ことで、感情的な痛みを共有している。このような文脈において、例（25a）の *thương* を用いることは自然である。

Levinson（1996）の相対的参照枠に基づき、例（24）と例（25）における話者の視点の違いと、それに伴う感情表現の違いを視覚的に整理したのが、次の図3である。



左側の③は例（24）に対応し、話者（B）が相手（A）の状態を外部から観察する場面を示す。ここでの「心配」は自分の視点に基づくものであり、相手が実際に苦しむかは不明確である。そのため、*thương* のように「他者の傷を自己の感覚として受け取る」表現には不自然さが残る。一方、右側の④は例（25）のように話者が相手の視点に立ち、その内面的苦しみを自己の感覚として共有する状態を示す。ここで話者（B）は単に「相手を心配する」のではなく、相手（A）の苦しみを深く理解し、自分の痛みとして感じている。

6 まとめと今後の課題

本稿では、ベトナム語の感情表現 *thương* の意味的特徴を、辞書記述と現代語の実例分析を通して検討し、そのうえで日本語の「心が痛む」との比較を行った。まず、*thương* は身体的・心理的な意味を持ちつつ、現代では主に他者への共感や心配を表す感情動詞として用いられていることが明らかとなった。その用法は「相手の苦しみや状況を自分のことのように感じ取る」視点の共有を前提としており、「自分の内面的な反応」を中心とする日本語の「心が痛む」とは使用の条件や意味解釈において顕著な違いが見られた。

さらに、Levinson（1996）の「相対的参照枠」の理論を応用することで、感情表現に

おける視点の選択が意味形成に与える影響を明確にすることができた。thương の用法においては、話者が対象の視点に立って状況を受け止めることが、共感や心配といった意味を成立させる重要な要素である。

また、これまでの分析では、thương は対象が明示的に苦痛や困難を経験している文脈で自然に用いられるとされてきた。しかし、対象が必ずしも「苦しんでいる」といった感情状態を示していないにもかかわらず、thương が違和感なく使用される例も確認される。

- (26) 【私たちが募金を募っていると、小学4年生の少女が貯金を全て持ってきて被災地の人々に寄付した。少女はお金を手渡す際、「少しでも困っている人たちの力になれば」と嬉しそうにしていた。私たちは少女が全てのお金を差し出したことが気になると同時に、その優しさに感動した。】

ベトナム語：Chúng tôi cảm-thấy thương tâm³ lòng của cô bé.

私たち 感じる - 見える 傷 類別詞 内臓 の 彼女

字句通りの逐語訳：私はその子の内臓の傷を感じて見える。

ニュアンスを含めた訳：私はその子の思いやりの心の傷を感じ、自分の傷のように受け止める。

たとえば、例 (26) のように、小学4年生の少女が被災地支援のために自分の貯金をすべて寄付し、「少しでも困っている人の力になれば」と嬉しそうに語っていた。このように、対象が喜びの感情を示している状況であっても、thương の使用は自然に成立している。

一方、5節の例 (24) のように、30歳の息子が働かず遊んでばかりいる場面では、母親が息子に対して同様に thương を用いることは不自然である。このような差異は、単に対象が苦しんでいるかどうかでは説明しきれない。

この二つの例を比較すると、thương の成立には、対象が実際に苦しんでいるかどうかだけでなく、対象が「弱い・守られるべき存在」として認識されるか、あるいは対象の行動に「他者志向性」や「自己犠牲性」が見られるかといった、話者が苦しみや痛ましさを想像しやすくし、共感を抱きやすくする要素も関与している可能性が考えられる。例 (26) の少女の場合、たとえ本人が嬉しそうにしていたとしても、話者はその無防備さや善意、犠牲的な行動から、相手の「痛ましさ」や「弱さ」を自然に読み取り、

³ tâm (類別詞): 薄くて長い平たいものを表す名詞につける (Ngo 2014:188)

thương の使用に違和感を覚えない。一方、例 (24) の息子にはそのような要素が乏しく、話者が共感を寄せるための基盤が形成されにくいいため、thương の使用は成立しにくい。

このように、thương の成立には、その人物の属性や行動の性質、さらには話者の想像的理解が複合的に関与していると考えられる。この点については今後、さらなる分析が求められる。

参考文献

- Ekman, P. (2003). *Emotions revealed: Recognizing faces and feelings to improve communication and emotional life*. Times Books / Henry Holt and Co.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). The cognitive model of anger inherent in American English. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought*. Cambridge University Press, 195–221.
- Levinson, S. C. (1996). Language and space. *Annual Review of Anthropology*, 25, 353–382.
- Matsuki, K. (1995). Metaphors of anger in Japanese. In J. Taylor & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the cognitive construal of the world*. Mouton de Gruyter, 137–151.
- Wierzbicka, A. (1986). Human emotions: Universal or culture-specific? *American Anthropologist*, 88 (3), 584–594.
- Đào Duy Anh (2005). Hán Việt Từ Điển Giản Yếu (『漢越辞典簡要』) [原著 1931 年刊]. 文化情報出版社.
- Hội Khai Trí Tiến Đức (1954). Việt Nam Tự Điển (『越南辞典』). ヴァンムオイ出版社.
- Huỳnh-Tĩnh Paulus Của (1895). Đại Nam Quốc Âm Tự Vị (『大南國音字彙』). Imprimerie Rey, Curiol & Cie.
- Ngo Quang Vinh (2014). 『現代ベトナム語の類別詞研究—類別詞の本質とその意味・用法—』. 一橋大学博士論文.
- Thiều Chửu (1942). Hán Việt Từ Điển (『漢越辞典』). ホーチミン市出版社.
- Viện Ngôn Ngữ Học (言語学研究所) (主編: Hoàng Phê). (2021). Từ Điển Tiếng Việt (『ベトナム語辞典』) [初版 1988 年]. Hồng Đức 出版社.